

- 7) Ruth Sullivan and Stewart Smith, "Narrative Stance" in *The Awakening*, 2nd ed., ed. by Margo Culley (New York: Norton, 1994), p. 229.
- 8) 拙稿, 「*The Awakening*における「目覚め」の行方と結末」, 『文藝と思想』(福岡女子大学文学部), 第55号, (1991), 21-40では結末をEdnaの敗北を示すものと考えた。
- 9) Per Seyersted & Emily Toth (eds.), *A Kate Chopin Miscellany* (Natchintoches: Northwestern State University Press, 1979), p. 62.

から非難される、とかなり辛辣な内容である。伝記などによれば、Chopinは社交的で人々を引き付けるだけの魅力を持った女性だったらしいのだが、心の中ではこのように人に対しても自分に対してもかなり皮肉な見方をしていることが、この一節からうかがえる。物事を一面からだけは見ようとしないう傾向は彼女が作品を書いた時にも発揮されたと考えられる。

また、Chopinはルイジアナ地方を舞台にした地方色作家としてまず世に知られたせいか、南部の女性作家の一人と見なされることが多いが、実際は西部への入口として知られるミズーリ州セントルイス生まれで、お墓もまたセントルイスにある。1870年に結婚してから14年間ほどニューオーリンズやルイジアナ州のCloutiervilleで暮らす、夫の死後に彼女が作品を書き始めたのは、生まれ故郷のセントルイスにもどってからなのである。セントルイスは場合によっては南部にも含まれる土地であるし、Chopin自身はカトリックだったので、Ednaほどのカルチャーショックはなかったものの、やはりルイジアナをよそ者の目で見ることも多かったのではないかと、推測できる。いわゆる南部の神話が作品の題材として取り上げられることが少ないのも、対象に対して距離を取るのも、この出身地のことが関連しているのは間違いない。ちなみに、セントルイスもニューオーリンズも当時は様々な人種、文化が入り交じる土地であったために、対象に対する相対的なものの見方が自然に身についたのではないかと、いうのも十分に考えられることである。

註

- * 本稿は日本英文学会第47回九州支部大会（1994年10月23日）のシンポジウム「アメリカ南部女性作家を再読する」において口頭発表した論旨をもとに、加筆・修正したものである。
- 1) *Encyclopedia of Southern Culture* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1989), 1124.
- 2) Per Seyersted, *Kate Chopin: A Critical Biography* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1969), p. 94.
- 3) Per Seyersted (ed.), *The Complete Works of Kate Chopin* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1969), p. 234. 以下、Chopinの短編作品からの引用は同書による。
- 4) C. Hugh Holman, *A Handbook to Literature* (Indianapolis: Bobbs-Merrill Educational Publishing, 1980), p. 394.
- 5) Margaret Culley (ed.), *The Awakening* (New York: Norton, 1976), p. 48. 以下、この作品からの引用は同書により、引用箇所の章を末尾に記す。
- 6) George Arms, "Contrasting Forces in the Novel" in *The Awakening*, 2nd ed., ed. by Margo Culley (New York: Norton, 1994), p. 200.

でいる。一例をあげれば、作中で繰り返し用いられる主要なイメージのひとつである鳥についても、対照的なふたつの意味が与えられている。最後の場面で海辺の情景が描写される時、あたりを巡回する「翼の折れた鳥」(“a bird with a broken wing”)は、自由を求めて世間と戦いながら敗れたEdnaの姿と重ね合わされていると考えられる。けれども、4章では母性豊かなクレオール母親たちの姿は、「大切な子供たちに害が及べば、保護するための翼を広げてそわそわする」(“fluttering about with extended, protecting wings when any harm, real or imaginary, threatened their precious brood”)鳥にたとえられている。Ednaだけではなく、Madame Ratignolleも、またEdnaの目覚めに大きな役割を果たした女性のピアニストMademoiselle Reiszにしても、肯定的な面と否定的な面との両方を合わせ持っているので、極端に言えば、読み手がどんな尺度を持っているかによって、*The Awakening*の意味は大きく異なってくると思えるのである。感覚の目覚めを軸として主人公が自己の内面を探りはじめる点を、*The Awakening*のロマンティズムと取るのが本論文での筆者の読み方なのだが、ここに述べたような曖昧さ、言い換えれば、作品の中で対照的なふたつの要素を提示し、どちらに重点を置いているのかわかりにくいことも、Chopinの複数の作品で見受けられることなので、指摘しておきたい。

III

それでは、なぜそのような対照的な見方がChopinの作品で示されるのか、その理由を作者に求めれば、Chopinの性格や出身地によって幾分かは説明できそうである。Chopinについては伝記的な資料もまだ少ないのだが、社交界で人気のある娘だった頃の日記に彼女の性格の一端をよく表していると思われる次のような一節がある。

I feel as though I should like to run away and hide myself; but there is no escaping—I am invited to a ball and I go.—I dance with people I despise; amuse myself with men whose only talent lies in their feet; gain the disapprobation of people I honor and respect; return home at day break with my brain in a state which was never intended for it,...

逃げて身を隠したいと思うが舞踏会に招かれたら出かける、軽蔑している人たちと踊る、唯一の才能が足にしかない人と楽しんでいる、尊敬している人たち

索するためのEdnaの試みと言えよう。ところが、そのような一連の行動を作者がどう描いているかと言え、非常に曖昧でアイロニカルな表現がたくさん見られるのである。たとえば、「目覚め」というタイトルにもかかわらず、Ednaの眠る場面は特に前半でよく出てくる。これに関連して、彼女がアメリカのロマン主義者すなわち超絶主義者の「エマーソンの本を眠くなるまで読んだ」という箇所に触れて、批評家George Armsは次のようにタイトルの「目覚め」が「再生」ともあるいは逆に「違った種類の死」とも解釈できると指摘している。

This sleepiness from reading Emerson leads to the contrast, implicit in the title. In treating Edna's awakening, the author shows irony and even deviousness. We look upon Edna's awakening as archetypal in marking her passage from death to rebirth, but we may also look upon her awakening as another kind of death that is self-sought. Amusingly enough, the author, quite consciously I am sure, allows Edna to do an inordinate amount of sleeping throughout the novel, in spite of her underlying vitality.⁶⁾

また、Ednaが初めて海で泳げた時の喜びが描写された先の引用箇所では、作者はEdnaは「自分の力を過信して大胆になった」と「過信」(“overestimating”)という言葉を使っている。“Narrative Stance”という批評の中で、Chopinは主人公に対して「二つの矛盾した見方をしている」と指摘されているが、この「過信」という言葉などは、作者が主人公の自己認識の欠如を指摘し否定的に見ていることを示す一例と言えよう。他にも多くの例が見られるが、このような描かれ方が、Ednaの人物像や最後に彼女が海に入っていくことをどう解釈するかについて、肯定的あるいは否定的な対照的な解釈が出てくる大きな原因のひとつになっていると考えられる。⁸⁾もし、主人公に対して否定的な箇所だけを抜き出していくとしたら、「目覚め」どころか、最初から目覚めるための自我すら主人公にはなかったのだという結論さえ出てきかねないのである。この見方を進めていくと、突然の衝動にかられ自分勝手な振る舞いをした女性が当然のごとく身を滅ぼした、それを突き放してリアリスティックに描いたのが、この作品だということになる。言い換えるならば、ニューオリンズを舞台とすることで、ロマンティックな雰囲気こそ全体に漂っているものの、ロマンティズムを支えるだけの主人公、自分を追求しようとして挫折した主人公など最初からいなかったということになってしまうのである。

このような曖昧さはEdnaの描かれ方だけではなく、作品の他の部分にも及ん

and managed to regain the land. (Chap. 10)

ところが、二十行足らずの中略箇所をはさんで、この泳げた喜びや自分の能力への確信は一転して「死の恐怖」(“A quick vision of death”)へと変わる。これはもちろん作品最後のEdnaの入水の場面へと至る伏線だが、このような海のふたつの顔は何を意味しているのだろうか。

これは、海がEdnaが自分の体の手答えや力を確かめることのできた場所でありながら、作品最後の場面では彼女の力を奪っていく場所にもなるという二重の働きをすることを示している。同じように、先ほど述べたクレオールたちの社会も、作品の前半ではEdnaが周囲の人々に心を開いていく大きなきっかけになっているのだが、結局は解放的なのは表面だけで、実は結婚制度の維持を互いの暗黙の了解事項としているという二重構造を持っていた。最初に彼女の感覚を刺激し開かせながら、同時に彼女を閉じ込めていくという意味では、Ednaにとってのクレオールの代表者Madame Ratignolleも同じである。彼女は、先に述べたように、人の体に触れることの心地好さをEdnaに教えるが、作品の最後の方では、Robertと会っている最中のEdnaを自分の出産の場に呼び寄せることによって、彼女に出産という現実、すなわち男性と関係を持てば子供が生まれるという結果を女性の体は引き受けざるを得ないという現実をも教えることになる。つまり、Madame Ratignolleも海も、前半ではEdnaの感覚を開かせたものでありながら、後半では彼女に自分の限界を思い知らせる大きな力になっていくわけである。このように考えれば、ニューオリンズという地域を作品の背景にすることによって、作者は単にロマンティックで異国風の雰囲気を作っただけでなく、主人公の自己への目覚めと挫折の道筋を巧妙に組み立てたと言える。もちろん、作品の前半では舞台を避暑地の島、後半ではニューオリンズの街中とすることで、ふたつの場所のコントラストをEdnaの変化に利用したことは言うまでもない。

さて、*The Awakening*を、自我に目覚めた主人公が周囲と衝突し、挫折し、自殺した物語と読むならば、話は簡単だが、丁寧に読んでみれば、果たしてそれほど単純に読んでしまってもよいのかという疑問が生じてくる。どういうことかといえば、先ほど「自分という個人への関心すなわちロマンティシズムの特徴が、特に肉体や感覚の解放を通じて示されるのが、Chopinの大きな特徴のひとつだ」と述べたとおり、目覚めることによって、Ednaは夫の家を出たり、絵を描くことで収入を得たり、恋人を作ったり、とそれまでは想像もできなかったような行動を取りはじめる。このような行動は、妻や母親という役割から逸脱していくことで、それらの役割をはぎ取られた時の自分の正体を懸命に模

人前でとても読めないとEdnaが思うような本も平気でまわし読みをする。話相手から親しみをこめて体に触れられることに最初はたじろぐものの、次第にそれに慣れ、受け入れていく彼女の変化はたとえば次のような場面で示されている。

Madame Ratignolle laid her hand over that of Mrs. Pontellier, which was near her. Seeing that the hand was not withdrawn, she clasped it firmly and warmly. She even stroked it a little, fondly, with the other hand, murmuring in an undertone, "*Pauvre Chérie.*"

The action was at first a little confusing to Edna, but she soon lent herself readily to the Creole's gentle caress. She was not accustomed to an outward and spoken expression of affection, either in herself or in others. (Chap. 7)

少女時代の思い出を語り終えたEdnaの手にMadame Ratignolleが触れる時、彼女はもはやその手を引っ込めようとはしない。後の恋人Alcée Arobinとの関係に見られるEdnaの官能性をまず引き出すのは、クレオール的女性の中でも典型的なよい妻、母親であるとされるMadame Ratignolleなのである。

次に、海をはじめとするグランドアイルの自然も、Ednaに対してはクレオール社会と同じように彼女の感覚を開いていく働きをしている。作品は、フランス語で「行ってしまえ」とうるさく繰り返す緑と黄色のオウムの姿で始まる。オウムの声、音楽、歌声、ミシンの音、海の波音、物が考えられないほどの暑さ、人物や風景描写に用いられる鮮やかな色彩など、五官を通して雰囲気伝える手法が特にグランドアイルを舞台とする前半では使われ、Ednaが周囲にどのように反応していくかが示されている。それらの自然の中でも特に海は、その夏はじめて泳ぎを覚えた彼女にとって、直接に体に触れ自分の泳ぐ能力を確信できた場所であり、その時の彼女の喜びの強さは次の引用文に示されている通りである。

A feeling of exultation overtook her, as if some power or significant import had been given her soul. She grew daring and reckless, overestimating her strength. She wanted to swim far out, where no woman had swum before.... A quick vision of death smote her soul, and for a second of time appalled and enfeebled her senses. But by an effort she rallied her staggering faculties

Body and soul free!” (354) と「自分」を意識するきっかけは、「自室の空気を満たす音、匂い、色」(“the sounds, the scents, the color that filled the air”) (353) を感じとることであった。“A Pair of Silk Stockings”でもたまたま臨時収入を手にした一家の主婦Mrs. Sommersが、最初は子供たちのための生活用品を買おうと街に出ながら、結局は自分のための絹靴下を買い、手袋を買い、雑誌、レストランでの食事、芝居へと貴重な金を使い果たしてしまうのも、「蛇のように」(501)指の間をすべった絹靴下の感触が発端であった。いずれも、主人公が自分を強烈に意識する瞬間があり、その瞬間には彼女たちの感覚の目覚めが欠かせないのである。

それでは、*The Awakening*のEdnaの場合、その感覚の目覚めがどのような方法で表されるかと言え、ば、“Ma’ame Pelagie”や“Désirée’s Baby”と同じく、南部的な背景が実に巧みに利用されていると思われるので、次にその背景について検討する。背景と言っても様々な要素があるが、その中から特に、その夏の避暑地でEdnaがほとんど初めて親しく接した解放的なクレオールの人々と、海をはじめとする自然を中心に話を進めることにする。いずれも、ニューオリンズという作品の舞台とは密接な関係があり、同じ南部と言ってもたとえばミシシッピでは利用できない背景である。

まず、クレオールとは17、8世紀にニューオリンズにやってきたフランス人とスペイン人との子孫で、それ以外にも様々な人種が混じっているが、主にフランスの文化を背景とする人々のことである。宗教的にはカトリックで、その女性は優美で美しく、よい主婦であるという特長を持っている。簡単に言えば、彼らはひとつのはっきりとした個性を持った文化集団であると言える。一方、Ednaはフランス人の血が混じっているものの、少女時代をケンタッキーで過ごし、その父親はミシシッピにプランテーションを持ち、南北戦争にも従軍の経験があるアメリカ人の女性として紹介されている。彼女が避暑地の島グランドアイルでクレオールたちと接触するにつれて、異質なふたつの文化すなわちEdnaがそれまで持っていたピューリタンの文化とクレオールたちの解放的な文化が衝突し、Ednaの感覚が開かれていく様子は、その後の彼女の変化の発端として細かく描かれている。具体的には、少女時代のある日、「長老会派の礼拝で、今考えてもぞっとするような陰気な調子で父親が読み上げていた祈りから逃げ出した」というEdnaは、早くに母親を亡くして育ったせいもあり、人に打ち解けない少女だったと思われる。周囲の雰囲気もおそらく互いの親しい触れ合いを許さない抑圧的なもので、彼女が心の中で非現実的でロマンティックな恋愛を繰り返したのも、その反動のひとつであろう。ところが、同じ場で暮らしてみると、クレ奥ールの女性は自分の出産経験をあからさまに人に語るし、

生じた挫折などの話が組み立てられるほどである。作品全体には、母親や妻としての「義務」、「役割」、「責任」という言葉がよく出てくるが、そういうものから離れた時の自分という個人が何者なのか。これがEdnaの「目覚め」の発端となっている。

The term [romanticism] designates a literary and philosophical theory which tends to see the individual at the very center of all life and all experience, and it places the individual, therefore, at the center of art,..⁴⁾

上の引用に見られる通り、自分という個人への関心はロマンティズムの中心概念になっているが、妻や母親ではない自分自身を次第に意識していく女性と
言えば、イプセンの『人形の家』(1879)の主人公ノラが思い出される。「子供のためなら命も捨てるが、自分自身は捨てられない」⁵⁾ (“I would give my life for my children; but I wouldn't give myself.”) というEdnaの言葉が、ノラが家を出ていく前の夫ヘルメルとのやりとりに似通っているからである。妻の家出を止めようとして「第一におまえは妻であり、母なのだから、その義務を無視してはいけない」と言う夫に対して、ノラは「何よりもまず自分は人間だ」と答えるのである。外から押しつけられた役割と、内面に芽生えた自分という意識が葛藤し、ともかくも「自分」を選び取ろうとしたという点では、Ednaとノラには大きな共通点がある。

ただし、Ednaの言う「自分」が決して抽象的な個人ではなく、感覚、肉体、性を含んだ丸ごとの「自分」だということには注目しておかなければならない。先ほど扱った短編“Ma'ame Pelagie”でも、過去を再現しようとする夢のために現在の生活の快適さ、感覚の喜びを犠牲にする所に作者の非難は向けられていた。1850年出版のアメリカ小説の古典*The Scarlet Letter*でのHesterとDimmsdaleの恋愛が重要な鍵となりながら、その恋愛の場面がほとんど直接には描かれなかったこと、また、1900年出版の*Sister Carrie*では女性主人公と二人の男との交渉が話の展開の重要な軸となりながら、その場面がやはりほとんど直接には描かれていないことを考えれば、肉体を持った人間としての自分に目覚めていくEdnaは、アメリカ文学の伝統の中ではやはり異質な女性である。そこで、自分という個人への関心すなわちロマンティズムの特徴が、特に肉体や感覚の解放を通じて示されるのが、Chopinの大きな特徴のひとつと言えよう。彼女の代表的な短編のひとつ、“The Story of an Hour”でも、主人公Mrs. Mallardが夫の鉄道事故死の知らせを聞いたショックから立ち直り、“Free!

weight”や“another life”といった言葉に注目すれば、この作品は姪にとっては制限された生活からの脱出の物語となる。もちろん、妹Paulineにとっても母親代わりに自分を支配してきた姉からの脱出の物語と読むことも可能で、このテーマがChopinの多くの作品に見られるのは周知の通りである。

次に、南部ロマンティシズムと直接の関係はないが、南部的なテーマのひとつである白人と黒人との異種族混交を扱ったChopinの短編“Désirée’s Baby”を見てみよう。Désiréeと名付けられた身元のわからない捨て子が美しく成長し、彼女を見初めた農園主Armandに求婚される。やがて二人の間に男の子が生まれるが、Armandは息子には黒人の血が混じっているのではないかと疑いはじめる。夫から詰問されて絶望したDésiréeが赤ん坊を抱いて川に身を投げた後になって、Armandは黒人の血が混じっているのは自分の方だった、ということを知り、亡き母親の残した手紙から知るといのが話の皮肉な結末である。南部ゆえに起こる悲劇として巧みに組み立てられた短編だが、見つけられた時の赤子のDésiréeが眠っていた大きな柱の「影」(“shadow”)、「頭巾」(“a cowl”)のようにArmandの屋敷にかぶさる屋根、「棺衣」(“a pall”)のように屋敷に影を投げかけるナラの木々などの言葉が示すように、登場人物たちは何かに覆われて読者にははっきり見えない。白人であるはずのArmandの皮膚の色は「濃く」(“dark”), La Blanche (白) という名前の黒人女が登場したりする。夫の詰問に対して身の証を立てようにも、捨て子であったDésiréeにはなす術がない。最後にいっきに実は黒人の血が混じっていたのはArmandだったと明かされる時、自分の身元の曖昧さという現代的なテーマもまたこの作品から読み取れるのである。

これら二つの短編を見た限りでは、南部的な素材を扱いながら、Chopinは同時にいわゆる普遍的なテーマも書き込んでいることがわかる。どちらも南部という背景が作品の重要な軸となりながらも、南部以外の土地や現代にも通じるテーマが扱われている。先に述べたような意味での南部ロマンティシズムがChopinの作品にあまり表れていないと感じられるのも、そのせいであろう。

II

本章では、*The Awakening*におけるロマンティシズムについて考えてみたい。結論を先に言えば、ここでも先に述べたような南部特有のロマンティシズムというよりも、既成の社会体制への反抗、自然の中への逃避、情熱的かつ絶望的な恋愛、自殺への志向、不合理なもの、神秘的なものへの憧憬、といった一般的なロマンティシズムの方が色濃く表れている。実際、これらをたどればそのまま主人公Ednaの一連の行動、つまり人妻の恋愛、夫への反抗、その結果

これらは後のFaulknerの作品に見られるようないわゆる南部の神話、南北戦争以前の黄金時代への憧れにつながっていくのであろうが、Chopinの場合、このような意味での南部ロマンティシズムはその作品の中にはあまり表れていないようである。

具体的には、Per SeyerstedによればChopinの作品の中でほとんど唯一「プランテーションの伝説」つまり南北戦争以前の時代への憧れを扱った短編²⁾“Ma’ame Pelagie”を取り上げてみよう。この作品には、戦争前の屋敷を再建する夢のために粗末な小屋に住み、非常に切り詰めた生活をしている50歳と35歳の姉妹、Ma’ame PelagieとPaulineが登場する。その二人の所に若い姪がやってきて一緒に暮らし始めるが、彼女には二人のあまりにも喜びのない息苦しい生活になじむことができない。姪が去ろうとするのを嘆く妹のために姉は屋敷の再建という永年の夢をあきらめて、人々が集まってくる小綺麗な家を建てるとというのが話の結末である。屋敷の再建という夢だけに注目すれば、Ma’ame PelagieはFaulknerのSutpenを連想させるが、彼女の場合、大事なものは屋敷そのものではない。つまり、彼女にとって屋敷の廃墟とは、その昔人々に囲まれ愛されていた昔を夢見ることのできる場所を意味しており、屋敷の再建とは、家族や恋人がおり幸せだった時間を再び取り返すことに他ならない。こう考えれば、Ma’ame Pelagieの夢は南北戦争以前の黄金時代というよりも、失われた愛の回復ということになる。彼女がまるで妹を娘のように愛するのも、妹だけが彼女が愛を知っていた昔から現在へと、手元に残されたただ一人の人間だからである。しかし、最後に姪が去ろうとするのを悲しむ妹を見兼ねて自分の夢をあきらめた時、彼女は現在の人々への愛のために過去の人々への愛を犠牲にする。結末の場面で彼女の姿が痛々しく老け込んでいるのはその代償の大きさを示すものだが、それでも、この作品の方向は過去ではなくて、現在と未来へと向かっている。また、この作品では、二人の生活に合わせて喜びのない生活をする自分を自分への罪だと考える若い姪や、その姪のもたらす解放感にひきつけられていく妹Paulineの姿も印象的である。

...it is as though a weight were pressing me backward here. I must live another life; the life I lived before. I want to know things that are happening from day to day over the world, and hear them talked about.³⁾

これは、二人の家から去ろうとする姪がその理由を語った時の文句だが、“a

Kate Chopin の ロマンティシズムについて*

酒 井 三 千 穂

I

1960年代からのChopin再評価の動きはその後も継続しており、その代表作 *The Awakening* (1899) は、1988年には *Approaches to Teaching World Literature* (Modern Language Association of America) の、1993年には *Case Studies in Contemporary Criticism* (Bedford Books of St. Martin's Press) の一冊に、加えられた。さらに、1994年には、この作品を普及させるのに力があつた A Norton Critical Edition の第二版が出された。作品そのものが100ページ余りであるのに対して、時代背景の資料や新しい批評が新たにつけ加えられ、初版に比べればおよそ100ページもの増加である。これらの出版は、*The Awakening* が単に女性作家の見直しという流れに乗っただけでなく、様々な角度から検討されるだけの内容を持った作品であることを示していると思われる。本論文では、特にChopinのロマンティシズムを検討することで、彼女の特徴のいくつかを考えることを目的とする。

ロマンティシズムと言っても、非常に広い意味があり、国や時代によっても様々な表れ方をする。Chopinの作品はアメリカ南部地方を舞台とすることが多いので、まずChopinと南部特有のロマンティシズムの関係について検討することにする。南部ロマンティシズムの定義もまた様々であろうが、たとえば、*Encyclopedia of Southern Culture* では、次のように、南部ロマンティシズムの特徴として、ノスタルジア、喪失、時間と歴史へのオブセッションなどをあげている。

Still, no matter how exuberant and boisterous the surface manifestations, southern romanticism has been most strongly attracted to nostalgia, loss, and, at a rarified level, to an obsession with time and history.¹⁾